



左右は肱川町で発見された版木、真ん中は現存する浮世絵をもとに復元された「狐釣之図」



保管状態も申し分のなかった歌麿の版木



歌麿を世に出したといわれる絵草紙屋「蔦屋耕書堂」の様子を再現



歌麿館の館内に足を踏み入ると、艶やかな歌麿版画の世界に引き込まれる

歌麿と大洲 そのカンケイは？

平成11年、旧肱川町で江戸時代の浮世絵師・喜多川歌麿の版木2枚が発見された。浮世絵を含め、江戸の出版文化を支えたのは木版印刷技術で、その原板が版木だ。山桜の板が使われており、多くの場合、表面を削り新たな図柄を彫るなど、繰り返し利用され消耗されたため現存するものは少ない。数多くの作品を残す歌麿でも、版木となると鳥取の渡辺美術館、米国のボストン美術館でそれぞれ1点ずつしか確認されていないのだ。その上、肱川の版木は、摺られた絵としては中央の図のみしか見つからない「狐釣之図」（3枚続き）のうちの左右の図柄だった。町は伝統木版技術を継承する現代の匠たちにこの図の復元を託し、そして色鮮やかに3枚一揃いの図柄が現代に甦ったのである。この大切な資料を後世に伝えるべく整備された「歌麿館」には、発見された版



時期によっては可愛い赤ちゃん鹿を見ることができる「鹿鳴園」



「風の博物館」には、国内はもとより世界中から集められた風に関する展示物が並んでいる



春の鹿野川湖畔では桜が咲き誇る

木と、時を隔てて復刻された版木が常時展示されている。また彫師・摺師と呼ばれる木版職人が使う道具類や浮世絵の制作工程、江戸の風俗も紹介されており、浮世絵の魅力と、それを作り上げた人々の息吹を感じることができる。

あ、見えた！ 目に見えない風の姿

爽やかな風が吹く肱川地域は、「風」をテーマにした町おこしで知られている。その核となるのが「風の博物館」だ。タイトルに「風」が付く映画や音楽のソフト、書物のコレクション、風や風車など風にちなんだ遊び道具などがズラリと並ぶ館内では、風と人間の関わりを楽しみながら学ぶことができる。また、ここには、日本で初めてのドラゴンコレクションコーナーも整備されている。風は本来、目には見えないものだが、このミュージアムをじっくりと見学すれば、姿のないはずの風が見えてくるに違いない。

ダム湖のほとり 鹿と人のパラダイス

鹿野川湖は昭和34年に完成したダム湖。肱川県立自然公園に指定されており、四季折々の美しい自然と親しむことができるスポットとして人気だ。ヘラブナや鯉のフィッシング、カヌーやボートなどのアウトドアが楽しめるほか、冬はオシドリが飛来し、春は桜が湖畔に彩りを添える。鹿野川湖を見下ろす高台には、レジャーゾーンも形成されている。特に可愛い鹿たちが出迎えてくれる鹿鳴園、別荘気分を味わえる鹿鳴園ケビンは、ファミリーに人気をよんでいる。